

高野聖

泉鏡花

青空文庫

「參謀本部編纂の地図をまた繰り開いて見るでもなからう、と思つたけれども、余りの道じゃから、手を触るさえ暑くるしい、旅の法衣の袖をかかげて、表紙を附けた折本になつてるのを引張り出した。

飛驒から信州へ越える深山の間道で、ちょうど立休らおうという一本の樹立も無い、右も左も山ばかりじゃ、手を伸ばすと達きそうな峰があると、その峰へ峰が乗り、巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間にただ一人我ばかり、およそ正午と覚しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、こう凶面を見た。「
 旅僧はそういつて、握拳を両方枕に乗せ、それで額を支えながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋からこの越前敦賀の旅籠屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてる限り余り仰向けになつたことのない、つまり傲然として物を見ない質の人物である。

一体東海道掛川の宿から同じ汽車に乗り組んだと覚えている、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰のごとく控えたから別段目にも留まらなかった。

尾張の停車場で他の乗組員は言合せたように、残らず下りたので、函の中にはただ上人と私と二人になった。

この汽車は新橋を昨夜九時半に発つて、今夕敦賀に入ろうという、名古屋では正午だったから、飯に一折の鮓を買った。旅僧も私と同じくその鮓を求めたのであるが、蓋を開けると、ばらばらと海苔が懸った、五目飯の下等なので。

(やあ、人参と干瓢ばかりだ。)と粗忽ツかしく絶叫した。私の顔を見て旅僧は耐え兼ねたものと見える、くつくつと笑い出した、もとより二人ばかりなり、知己にはそれからなつたのだが、聞けばこれから越前へ行つて、派は違うが永平寺に訪ねるものがある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、そこで同行の約束が出来た。

かれは高野山に籍を置くものだといった、年配四十五六、柔和ななんらの奇も見えぬ、懐しい、おとなしやかな風采で、羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの

襷巻えりまきをしめ、土耳其トルコの帽ぼうを冠かぶり、毛糸てぶくろの手袋てぶくろを嵌はめ、白足袋しろたびに日和下駄ひよりげたで、一見、僧侶そうりよよりは世の中の宗匠そうしようというものに、それよりもむしろ俗か。

(お泊りはどちらじゃな、) といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿のつまらなさを、しみじみ歎息たんそくした、第一盆ぼんを持って女中が坐睡いねむりをする、番頭が空世辞そらせじをいう、廊下ろうかを歩あるくとじろじろ目をつける、何より最も耐え難がたいのは晩飯の支度したくが済むと、たちまち灯あかりを行燈あんどんに換かえて、薄暗うすくらい処でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更ふけるまで寐ねることが出来ないから、その間の心持といつたらならない、殊ことにこの頃ごろは夜は長し、東京を出る時から一晩の泊とまりが気になつてならないくらい、差支さしつかえがなくなれば御僧おんそうとご一いつしよ所に。

快く領うなずいて、北陸地方を行脚あんぎやの節はいつでも杖つえを休める香取屋かとりやというのがある、旧もとは一軒けんの旅店りよてんであつたが、一人女ひとりむすめの評判ひりやうなのがなくなつてからは看板かんばんを外はずした、けれども昔むかしから懇意こんいな者は断らず泊めて、老人としより夫婦が内端うちわに世話をしてくれる、宜よろしくばそれへ、その代かわりといいかけて、折を下に置いて、

(ご馳走ちそうは人参と干瓢かんぴょうばかりじゃ。)

とからからと笑つた、慎み深つつしそうな打見うちみよりは気の軽い。

二

岐阜ではまだ蒼空が見えたけれども、後は名にし負う北国空、米原、長浜は薄曇り、幽に日が射して、寒さが身に染みると思ったが、柳ヶ瀬では雨、汽車の窓が暗くなるに従うて、白いものがちらちら交つて来た。

(雪ですよ。)

(さようじやな。)といったばかりで別に気に留めず、仰いで空を見ようともしない、この時に限らず、賤ヶ岳が、といつて、古戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語つた時も、旅僧はただ頷いたばかりである。

敦賀で悚毛の立つほど煩わしいのは宿引の悪弊で、その日も期したるごとく、汽車を下ると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、潜抜ける際もあらずなく旅人を取囲んで、手手手に喧しく己が家号を呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物を引手繰つて、へい難有う様で、を喰わす、頭痛持は血が上るほど耐え切れないのが、例の下を向いて悠悠々と小取廻しに通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなかつたから、幸いその後を跟いて町へ入つて、ほつという息を吐いた。

雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさらさらと面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の通はひっそりして一条二条縦横に、辻の角は広々と、白く積った中を、道の程八町ばかりで、とある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。

床にも座敷にも飾りといつては無いが、柱立の見事な、畳の堅い、炬の大きいなる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思わるる艶を持った、素ばらしい竈を二ツ並べて一斗飯は焚けそうな目覚しい釜の懸った古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ両手の先を竦まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、ちよつと世辞のいい婆さん、件の人參と干瓢の話を旅僧が打出すと、にこにこ笑いながら、縮緬雑魚と、鰯の干物と、とろろ昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取成なんど、いかにも、上人とは別懇の間と見えて、連の私の居心のいいといったらない。

やがて二階に寢床を拵えてくれた、天井は低い、梁は丸太で抱もあろう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の処では天窓に支えそうになっている、巖乗な屋造、これなら裏の山から雪崩が来てもびくともせぬ。

特に炬燵が出来ていたから私はそのまま嬉しく入った。寢床はもう一組おなじ炬燵に敷

いてあつたが、旅僧はこれには来らず、横に枕を並べて、火の気のない臥床に寝た。

寝る時、上人は帯を解かぬ、もちろん衣服も脱がぬ、着たまま円くなって俯向形に腰からすつぽりと入つて、肩に夜具の袖を掛けると手を突いて畏つた、その様子は我々と反対で、顔に枕をするのである。

ほどなく寂然として寐に就きそうだから、汽車の中でもくれぐれいったのはこのこと、私は夜が更けるまで寝ることが出来ない、あわれと思つてもうしばらくつきあつて、そして諸国を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に就かぬのが癖で、寝るにもこのままであるけれども目はまだなかなか冴えている、急に寐就かれないのはお前様とおんなじであらう。出家のいうことでも、教だの、戒だの、説法とばかりは限らぬ、若いので聞かすしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門名譽の説教師で、六明寺の宗朝という大和尚であつたそうなの。

「今にもう一人ここへ来て寝るそうじやが、お前様と同国じやの、若狭の者で塗物の旅商人。いやこの男なぞは若いが感心に実体な好い男。」

私が今話の序開をしたその飛驒の山越をやった時の、麓の茶屋で一緒になった富山の売薬という奴あ、けたいの悪い、ねじねじした厭な壮佼で。

まずこれから峠に掛ろうという日の、朝早く、もつとも先の泊はものの三時ぐらいには発つて来たので、涼しい内に六里ばかり、その茶屋までのしたのじやが朝晴でじりじり暑いわ。

慾張抜いて大急ぎで歩いたから咽が渴いてしようがあるまい、早速茶を飲もうと思うたが、まだ湯が沸いておらぬという。

どうしてその時分じやからというて、めつたに人通のない山道、朝顔の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。

床几の前には冷たそうな小流があつたから手桶の水を汲もうとしてちよいと気がついた。

それというのが、時節柄暑さのため、恐しい悪い病が流行って、先に通った辻などという村は、から一面に石灰だらけじやあるまいか。

(もし、姉さん。)といつて茶店の女に、

(この水はこりや井戸のござりますか。)と、きまりも悪し、もじもじ聞くとの。

(いんね、川のございます。)という、はて面妖など思った。

(山したの方には大分流行病がございますが、この水は何から、辻の方から流れて来るのではありませんか。)

(そうでねえ。)と女は何気なく答えた、まず嬉しやと思うと、お聞きなさいよ。

ここに居て、さつきから休んでござつたのが、右の売薬じや。このまた万金丹の下廻と来た日には、ご存じの通り、千筋の単衣に小倉の帯、当節は時計を挟んでいます、脚絆、股引、これはもちろん、草鞋がけ、千草木綿の風呂敷包の角ばつたのを首に結えて、桐油合羽を小さく畳んでこいつを真田紐で右の包につけるか、小弁慶の木綿の蝙蝠傘を一本、おきまりだね。ちよいと見ると、いやどれもこれも克明で分別のありそうな顔をして。

これが泊に着くと、大形の浴衣に変わって、帯広解で焼酎をちびりちびり遣りながら、旅籠屋の女のふとつた膝へ脛を上げようという輩じや。

(これや、法界坊。)

なんて、天窓あたまから嘗なめていら。

(異おつなことをいうようだが何かね、世の中の女が出来ねえと相場がきまつて、すつぺら坊主になつてやつぱり生命いのちは欲しいのかね、不思議じゃあねえか、争われねえもんだ、姉さん見ねえ、あれでまだ未練のある内がいいじゃあねえか、) といつて顔を見合せて二人でからからと笑つた。

年紀としは若し、お前まえさん様、私わしは真赤まつかになつた、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶ためら予つているとね。

ポンと煙管きせるを払はたいて、

(何、遠慮えんりよをしねえで浴びるほどやんなせえ、生命いのちが危やくなりや、薬を遣やらあ、そのために私わしがついてるんだぜ、なあ姉さん。おい、それだつても無銭たじゃあいけねえよ、憚はばかりながら神方しんぼう万金丹、一貼じょう三百だ、欲しくば買かいな、まだ坊主に報捨ほうしやをするような罪は造らねえ、それともどうだお前まえいうことを肯きくか。) といつて茶店の女の背中たたを叩たたいた。

私わしはそうそうに遁出にげだした。

いや、膝だの、女の背中だのといつて、いけ年としつかまつを仕つた和尚が業ぎやうてい体たいで恐入おそれいるが、話が、話じゃからそこはよろしく。」

四

「私わしも腹立はらたちまぎ紛まぎれじや、無暗むやみと急いで、それからどんどん山の裾すそを田圃道たんぼみちへかかる。半町なまちばかり行くと、路みちがこう急に高くなつて、上りのぼりが一カ処、横からよく見えた、弓ゆみな形かたちでまるで土で勅使橋ちやくしはしがかかつてるような。上を見ながら、これへ足を踏懸ふみかけた時、以前の薬くすり売うりがすたすたやつて来て追おいつ着いたが。

別に言葉も交かわさず、またものをいったからというて、返事をする気はこつちにもない。どこまでも人を凌しのいだ仕打しうちな薬売やくうりは流しり晒めにかけて故わざとらしゆう私わしを通越とおりこして、すたすた前へ出て、ぬつと小山のような路の突とつ先さきへ蝙蝠傘を差して立つたが、そのまま向うへ下りて見えなくなる。

その後から爪先つまさき上りあが、やがてまた太鼓たいこの胴どのような路の上へ体が乗った、それなりにまた下りくだりじや。

売薬は先へ下りたが立停たちどまつてしきりに四辺あたりをみまわしてゐる様子、執しゅう念ねん深く何か巧たくんだかと、快からず続いたが、さてよく見ると仔細しさいがあるわい。

路はここで二一条ふたすじになって、一一条いちじようはこれからすぐに坂のぼになって上りも急なり、草も両方から生茂おいしげったのが、路傍みちばたのその角かどの処ところにある、それこそ四抱よつかえ、そうさな、五抱いつかもあろうという一本の檜ひのきの、背後うしろへ蜿うねつて切出したような大巖おおいわが二ツ三ツ四ツと並んで、上の方へ層かさなつてその背後へ通じているが、私わしが見当をつけて、心組こころぐんだのはこちではないので、やっぱり今まで歩いて来たその幅はばの広いなだらかな方が正ましく本道、あと二里足らず行けば山になって、それからが峠になるはず。

と見ると、どうしたことかさ、今いうその檜ひのきじやが、そこらに何も無い路を横断よこぎつて見果はてのつかぬ田圃なかぞらの中なか空にじへ虹にじのように突出とつとている、見事ねがたな。根方ねがたの処ところの土つちが壊くずれて大おお鰻ぎを捏こねたような根が幾筋ともなく露あらわれた、その根から一筋の水がさつと落ちて、地のち上へ流ながれるのが、取とつて進すすもうとする道の真中まなかに流ながれ出してあたりは一面。

田圃いんぼが湖うみにならぬが不思議で、どうどうと瀬せになつて、前途ゆくてに一叢ひとむらの藪やぶが見える、それを境さかいにおよそ二町ばかりの間ままるで川かわじや。礫こいしはばらばら、飛石とびいしのようにひよいひよいと大跨おおまたで伝えそうにずつと見みごたえのあるのが、それでも人の手てで並ならべたに違ちがいはない。

もつとも衣服きものを脱ぬいで渡わたるほどの大事だいじなのではないが、本街道ほんかいどうにはちと難儀なんぎ過ぎて、な

かなか馬などが歩行かれる訳のものではないので。

売薬もこれで迷ったのであるうと思ふ内、切放れよく向を変えて右の坂をすたすと上りはじめた。見る間に檜を後に潜り抜けると、私が体の上あたりへ出て下を向き、

(おいおい、松本へ出る路はこつちだよ、) といって無造作にまた五六歩。

岩の頭へ半身を乗出して、

(茫然してると、木精が攫うぜ、昼間だつて容赦はねえよ。) と嘲るがごとく言い棄てたが、やがて岩の陰に入つて高い処の草に隠れた。

しばらくすると見上げるほどな辺へ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝とすれすれになつて茂の中に見えなくなつた。

(どっこいしよ、) と暢気なかけ声で、その流の石の上を飛々に伝つて来たのは、莫塵の尻当をした、何にもつけない天秤棒を片手で担いだ百姓じゃ。」

五

「さつきの茶店からここへ来るまで、売薬の外は誰にも逢わなんだことは申上げるまで

もない。

今別れ際に声を懸けられたので、先方は道中の商売人と見ただけに、まさかと思つても
 気迷がするので、今朝も立ちぎわによく見て来た、前にも申す、その凶面をな、こ
 こでも開けて見ようとしていたところ。

(ちよいと伺いとう存じますが、)

(これは何でござりまする、)と山国の人などは殊に出家と見ると丁寧についてくれる。
 (いえ、お伺い申しますまでもございせんが、道はやっぱりこれを素直に参るのでご
 ざいましょうな。)

(松本へ行かつしやる? あああ本道じゃ、何ね、この間の梅雨に水が出て、とてつも
 ない川さ出来たでがすよ。)

(まだずつとどこまでもこの水でございましょうか。)

(何のお前様、見たばかりじゃ、訳はござりませぬ、水になつたのは向うのあの藪までで、
 後はやっぱりこれと同一道筋で山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは旧大
 お邸の医者様の跡でな、ここいらはこれでも一ツの村でがした、十三年前の大水の時、か
 ら一面に野良になりましたよ、人死もいけえこと。ご坊様歩行きながらお念仏でも唱

えてやつてくれさつしやい。」と問わぬことまで深切に話します。それでよく仔細が解つて確たしかになりはなつたけれども、現に一人踏ふみ迷まよつた者がある。

（こちらの道はこりやどこへ行くので、）といつて売薬の入つた左手の坂を尋たずねて見た。

（はい、これは五十年ばかり前までは人が歩ある行あるいた旧道ですが。やつぱり信州へ出ます、先は一つで七里ばかり総体近うござりますが、いや今いま時とき往來の出来るのじゃあござりませぬ。去年もご坊様、親子連づれの巡じゆんれい礼れいが間違えて入つたというで、はれ大変な、乞食こじきを見たような者じやというて、人命に代りはねえ、追おつかけて助けべえと、巡査おまわりさま様が三人、村の者が十二人、一組になつてこれから押登つて、やつと連れて戻もどつたくらいですが。ご坊様も血氣はやに逸はつて近道をしてはなりましねえぞ、草臥くたびれて野宿をしてからがここを行かつしやるよりはましでござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。」

ここで百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたがふと猶たぬら予つたのは売薬の身の上で。まさかに聞いたほどでもあるまいが、それが本当ならば見み殺ころしじや、どの道私は出しゅつ家の体、日が暮くれるまでに宿へ着いて屋根の下に寝るには及およばぬ、追おつ着いて引戻してやろう。罷まかり違ちがうて旧道を皆歩ある行あるいても怪けしゆうはあるまい、こういう時候じや、狼おおかみの匂かみゆんでもなく、魍魅ちみ魍魅もうりの汐しおさきでもない、ままよ、と思つて、見送ると早はや深切な百姓の姿も見

えぬ。

(よし。)

思切おもいきつて坂道を取つて懸かかつた、俠氣おとこぎがあつたのではござらぬ、血氣はやに逸はつたではもとよりにない、今申したようではずつとも悟さとつたようじゃが、いやなかなかの臆病おくびょうもの者、川の水を飲むのさえ気が怯ひけたほど生命いのちが大事で、なぜまたと謂いわつしやるか。

ただ挨拶あいさつをしたばかりの男なら、私は実のところ、打棄うちちやつておいたに違いはないが、快からぬ人と思つたから、そのまま見棄わてるのが、故わざとするようで、気が責めてならぬだから、」

と宗朝はやはり俯向うつむけに床とこに入つたまま合掌がっしょうしていった。

「それでは口でいう念仏にも済まぬと思つてさ。」

六

「さて、聞かつしやい、私わしはそれから檜ひのきの裏うらを抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹きの中なかを潜くぐつて草深い径こみちをどこまでも、どこまでも。」

するといつの間にか今上った山は過ぎてまた一ツ山が近いて来た、この辺しばかりの間は野が広々として、さつき通った本街道よりもっと幅の広い、なだらかな一筋道。

心持西と、東と、真中に山を一ツ置いて二三条並んだ路のような、いかさまこれならば檜を立てても行列が通ったであろう。

この広ツ場でも目の及ぶ限り芥子粒ほどの大きさの売薬の姿も見ないで、時々焼けるような空を小さな虫が飛び歩いた。

歩行くにはこの方が心細い、あたりがぼつとしていると便がないよ。もちろん飛驒越と銘を打った日には、七里に一軒十里に五軒という相場、そこで粟の飯にありつけば都合も上の方ということになっております。それを覚悟のことで、足は相応に達者、いや屈せずに進んだ進んだ。すると、だんだんまた山が両方から逼つて来て、肩に支えそうな狭いとこになった、すぐに上。

さあ、これからが名代の天生峠と心得たから、こつちもその気になって、何しろ暑いので、喘ぎながらまず草鞋の紐を緊直した。

ちようどこの上口の辺に美濃の蓮大寺の本堂の床下まで吹抜けの風穴があるということを年経つてから聞きました、なかなかそこどころの沙汰ではない、一生

懸命、景色も奇跡もあるものかい、お天気さえ晴れたか曇つたか訳が解らず、目じろぎもしないですたすたと捏ねて上る。

とお前様お聞かせ申す話は、これからじやが、最初に申す通り路がいかにも悪い、まるで人が通いそうでない上に、恐しいのは、蛇で。両方の叢に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡しているではあるまいか。

私は真先に出会した時は笠を被つて竹杖を突いたまま、はつと息を引いて膝を折つて坐つたて。

いやもう生得大嫌、嫌というより恐怖いのでな。

その時はまず人助けにずるずると尾を引いて、向うで鎌首を上げたと思うと草をさらさらと渡つた。

ようよう起上つて道の五六町も行くと、またおなじように、胴中を乾かして尾も首も見えぬのが、ぬたり！

あツというて飛退いたが、それも隠れた。三度目に出会つたのが、いや急には動かず、しかも胴体の太さ、たとい這出したところでぬらぬらとやられてはおよそ五分間ぐらい尾を出すまでに間があるうと思ふ長虫と見えたので、やむことをえず私は跨ぎ越した、とた

んに下腹が突張つてぞツと身の毛、毛穴が残らず鱗に變つて、顔の色もその蛇のようになつたろうと目を塞いだくらい。

絞るような冷汗になる気味の悪さ、足が竦んだというて立っていられる数ではないからびくびくしながら路を急ぐとまたしても居たよ。

しかも今度のは半分に引切つてある胴から尾ばかりの虫じゃ、切口が蒼を帯びてそれでこう黄色な汁が流れてびくびくと動いたわ。

我を忘れてばらばらとあとへ遁帰つたが、気が付けば例のがまだ居るのであろう、たとひ殺されるまでも二度とはあれを跨ぐ気はせぬ。ああさっきのお百姓がものの間違でも故道には蛇がこうといつてくれたら、地獄へ落ちても来なかつたにと照りつけられて、涙が流れた、南無阿弥陀仏、今でもぞつとする。」と額に手を。

七

「果が無いから肝を据えた、もとより引返す分ではない。旧の処にはやつぱり丈足らずの骸がある、遠くへ避けて草の中へ駈け抜けたが、今にもあとの半分が絡いつきそいで耐

らぬから氣臆きおくがして足が筋張すじばると石に躓つまずいて転んだ、その時膝節ひざぶしを痛めましたものに見える。

それからがくがくして歩行あるくのが少し難澁なんじゆうになつたけれども、ここで倒たおれては温氣うんぎで蒸殺むしころされるばかりじやと、我身わがみで我身を激はげまして首筋を取とつて引立てるようにして峠の方へ。

何しろ路傍みちばたの草いきれが恐おそしい、大鳥の卵見たたまごのようなものなんぞ足許あしもとにごろごろしている茂り塩梅あんばい。

また二里ばかり大蛇おろちの蜿うねるような坂を、山懐やまぶところに突つき当あたつて岩角を曲まつて、木の根を繞めぐつて参まゐつたがここのことで余りの道じやつたから、参謀さんぼう本部の絵図面を開いて見みました。

何やつぱり道はおんなじで聞いたにも見たのにも変かわりはない、旧道はこちらに相違ちがはないから心遣こころやりにも何にもならず、もとより歴れつきとした図面ずめんというて、描かいてある道はただ栗くりの毬いがの上へ赤い筋が引張ひつてあるばかり。

難儀なんぎさも、蛇も、毛虫も、鳥の卵も、草いきれも、記してあるはずはないのじやから、さつぱりと畳たたんで懐ふところに入れて、うむとこの乳の下へ念仏を唱え込んで立直たつたはよいが、

息も引かぬ内に情無い長虫が路を切った。

そこでもう所詮叶わぬと思つたなり、これはこの山の霊であろうと考えて、杖を棄てて膝を曲げ、じりじりする地に両手をついて、

(誠に済みませぬがお通しなすつて下さりまし、なるたけお午睡の邪魔になりませぬようにそつと通行いたしまする。

ご覧の通り杖も棄てました。)と我折れしみじみと頼んで額を上げるとぎつという凄しい音で。

心持よほどの大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈余、だんだんと草の動くのが広がつて、傍の溪へ一文字にさつと靡いた、果は峰も山も一斉に揺いだ、恐毛を震つて立竦むと涼しさが身に染みて、気が付くと山風よ。

この折から聞えはじめたのはどつという山彦に伝わる響、ちようど山の奥に風が渦巻いてそこから吹起る穴があいたように感じられる。

何しろ山霊感あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくなつたので、気も勇み足も撻取つたが、ほどなく急に風が冷たくなつた理由を会得することが出来た。

というのは目の前に大森林があらわれたので。

世の譬にも天生峠は蒼空に雨が降るといふ、人の話にも神代から杣が手を入れぬ森があるといふのに、今までは余り樹がなさ過ぎた。

今度は蛇のかわりに蟹が歩きそうに草鞋が冷えた。しばらくすると暗くなつた、杉、松、榎と処々見分けが出来るばかりに遠い処から幽に日の光の射すあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森を射通す工合であろう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい処があつた。

時々爪尖に絡まるのは葉の雫の落溜つた糸のような流で、これは枝を打つて高い処を走るので。ともするとまた常磐木が落葉する、何の樹とも知れずばらばらと鳴り、かさかさと音がしてぱつと檜笠にかかるともある、あるいは行過ぎた背後へこぼれるものもある、それ等は枝から枝に溜つていて何十年ぶりではじめて地の上まで落ちるのか分らぬ。

八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯なようでも修行の積みぬ身には、こういう

暗い処の方がかえつて観念に便たよりがよい。何しろ体が凌しのぎよくなつたために足の弱よわりも忘れたので、道も大きに抄取はかどつて、まずこれで七分は森の中を越したろうと思ふ処で五六尺天窓あたまの上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち留まつたものがある。

鉛なまりおもりの錘かとおもう心持、何か木の実でもあるかしらんと、二三度振つてみたが附着くつついていてそのままには取れないから、何心なく手をやって掴つかむと、滑なめらかに冷ひやりと来た。

見ると海鼠なまこを裂さいたような目も口もない者じやが、動物には違ちがいない。不気味で投出なげだせうとするとずるずると這すべつて指の尖さきへ吸すついてぶらりと下つた、その放れた指の尖さきから真赤な美しい血が垂たらたら々と出たから、吃驚びつくりして目の下へ指をつけてじつと見ると、今折曲たげげた肱ひじの処へつると垂懸たれかかつているのは同形おなじかたちをした、幅が五分、丈たけが三寸ばかりの山海鼠やまなまこ。

呆氣あつけに取られて見る見る内に、下の方から縮みながら、ぶくぶくと太つて行くのは生血いきちをしたたかに吸込むせいで、濁にごつた黒い滑らかな肌はだに茶褐色ちやかっしよくの縞しまをもつた、疣胡瓜いぼきゅうりのような血を取る動物、こいつは蛭ひるじやよ。

誰たが目にも見違えるわけのものではないが、図抜ずぬけて余り大きいからちよつとは気がつかぬであつた、何の虫はたけでも、どんな履歴りれきのある沼ぬまでも、このくらいな蛭はあろうとは思われ

ぬ。

腕をぼさりと振ったけれども、よく喰込んだと見えてなかなか放れそうにしないから不
 気味ながら手で抓んで引切ると、ぷつりといつてようよう取れる、しばらくも耐つたもの
 ではない、突然取つて大地へ叩きつけると、これほどの奴等が何万となく巢をくつて我
 ものにしていようという処、かねてその用意はしていると思われるばかり、日のあたらぬ
 森の中の土は柔い、潰れそうにもないのじや。

ともはや頸のあたりがむずむずして来た、平手で扱て見ると横撫に蛭の背をぬるぬる
 とすべるといふ、やあ、乳の下へ潜んで帯の間にも一疋、蒼くなつてそつと見ると肩の上
 にも一筋。

思わず飛上つて総身を震いながらこの大枝の下を一散にかけぬけて、走りながらまず
 心覚えの奴だけは夢中でもぎ取つた。

何にしても恐しい今の枝には蛭が生つていたのであるうとあまりの事に思つて振返ると、
 見返つた樹の何の枝か知らずやつぱり幾ツといふこともない蛭の皮じや。

これはと思う、右も、左も、前の枝も、何の事はないまるで充満。

私は思わず恐怖の声を立てて叫んだ、すると何と？ この時は目に見えて、上からぼた

りぼたりと真黒な瘦^やせた筋の入った雨が体へ降^やかかって来たではないか。

草鞋^はを穿いた足の甲^{こう}へも落ちた上へまた累^{かさな}り、並んだ傍^{わき}へまた附着^{くつつ}いて爪^{つま}先も分らなくなつた、そうして活^いきてると思^ううだけ脈^みを打^つて血^ちを吸^ひうような、思^いなしが一ツ一ツ伸^{のび}縮^{ちぢ}みをするようなのを見るから氣^きが遠^{とほ}くなつて、その時不思議な考^くえが起^おきた。

この恐^{おそ}しい山^{やま}蛭^{むし}は神代^{かみよ}の古^{いにし}からここ^{こゝ}に屯^{たむろ}をしていて、人の來^きるのを待^{まち}ちつけて、永^{とほ}い久^{ひさ}しい間^まにどのくらい何^{なん}斛^{ごく}かの血^ちを吸^ひうと、そこでこの虫^{むし}の望^{のぞ}みが叶^{かな}う、その時はありつたけの蛭^{むし}が残^{のこ}らず吸^ひつただけの人間^{にんげん}の血^ちを吐^はき出すと、それがために土^{つち}がとけて山^{やま}一^{いつ}面^{めん}に血^ちと泥^{どろ}との大沼^{おほいづみ}にかわるであらう、それと同時にここ^{こゝ}に日^ひの光^{ひかり}を遮^さって昼^{ひる}もなお暗^くい大木^{おほき}が切^き々^{げげ}に一^{いつ}ツ一^{いつ}ツ蛭^{むし}になつてしま^まうのに相違^{さうい}ないと、いや、全くの事^{こと}で。」

九

「およそ人間^{にんげん}が滅^めびるのは、地球^{ちきゅう}の薄^{うす}皮^{かわ}が破^{やぶ}れて空^{そら}から火^ひが降^ふるのでもなければ、大海^{たいかい}が押^お被^かさるのでもない、飛^ひ騷^{さう}国の樹^き林^{りん}が蛭^{むし}になるのが最初^{さいしょ}で、しまいには皆^{みな}血^ちと泥^{どろ}の中に筋^{すぢ}の黒^{くろ}い虫^{むし}が泳^{およ}ぐ、それが代^{だい}がわり^{わり}の世界^{せかい}であらうと、ぼんやり。

なるほどこの森も入口では何の事もなかったのに、中へ来るとこの通り、もつと奥深く進んだら早や残らず立樹の根の方から朽ちて山蛭になっていよう、助かるまい、ここで取殺される因縁らしい、取留めのない考えが浮んだのも人が知死期に近いたからだとふと気が付いた。

どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見ておこうと、そう覚悟がきまつては気味の悪いも何もあつたものじゃない、体中珠数生になつたのを手当次第に掻い除け撈り棄て、抜き取りなどして、手を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂う形で歩行き出した。

はじめの中は一廻も太つたように思われて痒さが耐らなかつたが、しまいにはげっそり瘦せたと感じられてずきずき痛んでならぬ、その上を容赦なく歩行く内にも入交りに襲いおつた。

既に目も眩んで倒れそうになると、禍はこの辺が絶頂であつたと見えて、隧道を抜けたように、遙に一輪のかすれた月を拝んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空の下へ出た時には、何のことも忘れて、砕ける、微塵になれと横なぐりに体を山路へ打倒した。それだからもう砂利でも針でもあれと地へこすりつけて、十余りも

たらさぞいい心地こころちであろうと思ふくらい、何の渡りかけて壊れたらそれなりけり。

危いとも思わずにずっと懸かかる、少しぐらぐらしたが難なく越した。向うからまた坂じゃ、今度は上りのぼり、ご苦労千万。」

十

「とてもこの疲れつかようでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途ゆくてに、ヒイイ
ンと馬の嘶いななくのが、何こだまして聞えた。

馬ま士ごが戻るのか小荷駄こにだが通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の経つたは僅わずじやが、
三年も五年も同一おんなじものをいう人間とは中へだを隔てた。馬まが居るようではともかくも人里に縁
があると、これがために気が勇んで、ええやつと今ひと一もみ揉もみ。

一軒の山家やまがの前へ来たのには、さまで難儀なんぎは感じなかつた。夏なつのことで戸障子のしまり
もせず、殊ことに一軒家、あけ開いたなり門というてもない、突いき然なり破縁やれえんになつて男が一人、
私わしはもう何の見境もなく、

(頼たのみます、頼たのみます、) というさえ助たすけを呼ぶような調子で、取とり縫すがらぬばかりにした。

(ご免なさいまし、) といったがものもいわない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ぐほど顔を横にしたまま小児らしい、意味のない、しかもぼつちりした目で、じろじろと門に立つたものを瞻める、その瞳を動かすさえ、おつくうらしい、気の抜けた身の持方。裾短かで袖は肱より少い、糊気のある、ちやんちやんを着て、胸のあたりで紐で結えたが、一ツ身のものを着たように出ツ腹の太り肉、太鼓を張ったくらいに、すべすべとふくれてしかも出臍という奴、南瓜の蒂ほどな異形な者を片手でいじくりながら幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくなれば暖簾を立てたように畳まれそうな、年紀がそれでいて二十三、口をあんぐりやった上唇で巻込めよう、鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鶏冠のごとくになつて、頸脚へ撥ねて耳に被った、唾か、白痴か、これかから蛙になろうとするような少年。私は驚いた、こつちの生命に別条はないが、先方様の形相。いや、大別条。

(ちよいとお願い申します。)

それでもしかたがないからまた言葉をかけたが少しも通ぜず、ばたりというと僅に首の位置をかえて今度は左の肩を枕にした、口の開いてること旧のごとし。

こういうのは、悪くすると突いきなり然いふんづかまえて臍ひねを捻ひねりながら返事なのかわりに嘗なめようも知れぬ。

私わしは一足退すきつたが、いかに深山だといつてもこれを一人で置くという法はあるまい、と足を爪つまだ立てて少し声こわだか高かに、

(どなたぞ、ご免なさい、) といった。

背戸せどと思うあたりで再び馬いななの嘶いななく声。

(どなた、) と納戸なんどの方でいったのは女じやから、南無三宝なむさんぼう、この白い首うしろこには鱗うろこが生えて、体ゆかは床ゆかを這はつて尾おしをずると引いて出ようと、また退すきつた。

(おお、お坊様ぼうさま。) と立たち頭あれたのは小造こづくりの美しい、声こゑも清すずしい、ものやさしい。私わしは大息おほいきを吐ついて、何にもいわず、

(はい。) と頭つむりを下げましたよ。

婦人おんなは膝ひざをついて坐すわつたが、前まへへ伸のび上あるようにして、黄昏たそがれにしよんぼり立つた私わしが姿すがたを透すかして見て、

(何か用でござんすかい。)

休やすめともいわずはじめから宿つねよの常世とこよは留守るすらしい、人ひとを泊とめないときめたもののように

見える。

いい後おくれてはかえつて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕し誼ぎにもなることと、つかつかと前へ出た。

丁寧ていねいに腰かがを屈かめて、

（私は、山越で信州へ参ります者ですが旅籠はたごのございます処まではまだどのくらいでございましょう。）

十一

（あなたまだ八里余あまりでございますよ。）

（その他ほかに別に泊めてくれます家うちもないのでしょうか。）

（それはございませぬ。）といいなから目またたきもしないで清すずしい目で私わしの顔をつくづく見ていた。

（いえもう何でございます、実はこの先一町行け、そうすれば上段の室へやに寝かして一晩扇あおいでいてそれで功德くんとくのためにする家があると承うけたまわりましても、全くのところ一足も歩ある行けま

すのではございません、どこの物置でも馬小屋の隅でもよいのでございますから後生
 でございます。とさつき馬が嘶いたのは此家より外にはないと思つたから言つた。

婦人はしばらく考えていたが、ふと傍を向いて布の袋を取つて、膝のあたりに置いた桶
 の中へざらざらと一幅、水を溢すようにあけて縁をおさえて、手で掬つて俯向いて見た
 が、

（ああ、お泊め申しましょう、ちようど炊いてあげますほどお米もございますから、それ
 に夏のことで、山家は冷えましても夜のものにご不自由もござんすまい。さあ、ともかく
 もあなた、お上り遊ばして。）

というと言葉の切れぬ先にどつかと腰を落した。婦人はつと身を起して立つて来て、
 （お坊様、それでございますがちよつとお断り申しておかねばなりません。）

はつきりいわれたので私はびくびくもので、

（はい、はい。）

（いいえ、別のことじゃござんせぬが、私は癖として都の話聞くのが病でございます、
 口に蓋をしておいでなさいましても無理やりに聞こうといたしますが、あなた忘れてもそ
 の時間かして下さいますな、ようござんすかい、私は無理にお尋ね申します、あなたはど

うしてもお話しなさいませぬ、それを是非にと申しましても断つておっしゃらないようにきつと念を入れておきますよ。）

と仔細ありげなことをいった。

山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人の言葉とは思つたが保つにむずかしい戒でもなし、私はただ頷くばかり。

（はい、よろしゅうございます、何事もおっしゃりつけは背きますまい。）
婦人は言下に打解けて、

（さあさあ汚うございますが早くこちらへ、お寛ぎなさいまし、そうしてお洗足を上げましようかえ。）

（いえ、それには及びませぬ、雑巾をお貸し下さいまし。ああ、それからもしそのお雑巾次手にずつぷりお絞んなすつて下さると助ります、途中で大変な目に逢いましたので体を打棄りたいほど気味が悪うございますので、一ツ背中を拭こうと存じますが、恐入りますな。）

（そう、汗におなりなさいました、さぞまあ、お暑うござんしたでしょう、お待ちなさいまし、旅籠へお着き遊ばして湯にお入りなさいますが、旅するお方には何よりご馳走だ

と申しますね、湯どころか、お茶さえ碌におもてなしもいたされませんが、あの、この裏の崖を下りますと、綺麗な流がございませうからいつそそれへいらつしやッてお流しがよろしゅうございませう。」

聞いただけでも飛んでも行きたい。

（ええ、それは何より結構でございませうな。）

（さあ、それではご案内申しましょう、どれ、ちようど私も米を磨ぎに参ります。）と件の桶を小脇に抱えて、縁側から、藁草履を穿いて出たが、屈んで板縁の下を覗いて、引出したのは一足の古下駄で、かちりと合して埃を払いて揃えてくれた。

（お穿きなさいまし、草鞋はここにお置きなすつて、）

私は手をあげて、一礼して、

（恐入ります、これはどうも、）

（お泊め申すとなりましたら、あの、他生の縁とやらでござんす、あなたご遠慮を遊ばしますなよ。）まず恐しく調子がいいじやて。」

「(さあ、私に跟いてこちらへ、)と件の米磨桶を引抱えて手拭を細い帯に挟んで立った。

髪は房りとするのを束ねてな、櫛をはさんで簪で留めている、その姿の佳さというてはなかつた。

私も手早く草鞋を解いたから、早速古下駄を頂戴して、縁から立つ時ちよいと見ると、それ例の白痴殿じや。

同じく私が方をじろりと見たつけよ、舌不足が饒舌るような、愚にもつかぬ声を出して、

(姉や、こえ、こえ。)といいながら気だるそうに手を持上げてその蓬々と生えた天窓を撫でた。

(坊さま、坊さま?)

すると婦人が、下ぶくれな顔にえくぼを刻んで、三ツばかりはきはきと続けて頷いた。少年はうむといったが、ぐたりとしてまた臍をくりくりくり。

私は余り気の毒さに顔も上げられないでそつと盗むようにして見ると、婦人は何事も別

に氣に懸けてはおらぬ様子、そのまま後へ跟いて出ようとすると、紫陽花の花の蔭からぬいと出た一名の親仁がある。

背戸から廻つて来たらしい、草鞋を穿いたなりで、胴乱の根付を紐長にぶらりと提げ、銜煙管をしながら並んで立停つた。

(和尚様おいでなさい。)

おんな 婦人はそなたを振向いて、

(おじ様どうぞごんした。)

(さればさの、頓馬で間の抜けたというのはあのことかい。根ツから早や狐でなければ乗せ得そうにもない奴じやが、そこはおらが口じや、うまく仲人して、二月や三月はお嬢様がご不自由のねえように、翌日はものにしてうんとここへ担ぎ込みます。)

(お頼み申しますよ。)

(承知、承知、おお、嬢様どこさ行かつしやる。)

(崖の水までちよいと。)

(若い坊様連れて川へ落つこちさつしやるな、おらここに眼張つて待つとるに、)と横様に縁にのさり。

(貴僧、あんなことを申しますよ。)と顔を見て微笑んだ。

(一人で参りましょう。)と傍へ退くと、親仁はくつくつと笑って、

(はははは、さあ、早くいつてござらっせえ。)

(おじ様、今日はお前、珍しいお客がお二方ござんした、こういう時はあとからまた見えようも知れませんが、次郎さんばかりでは来た者が弱んなさろう、私が帰るまでそこに休んでいておくれでないか。)

(いいとも。)といいかけて、親仁は少年の傍へにじり寄って、鉄挺を見たような拳で、背中をどんとくらわした、白痴の腹はだぶりとして、ベそをかくような口つきで、にやりと笑う。

私はぞつとして面を背けたが、婦人は何気ない体であった。

親仁は大口を開いて、

(留守におらがこの亭主を盗むぞよ。)

(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りましょうか。)

背後から親仁が見るように思ったが、導かるるままに壁について、かの紫陽花のある方ではない。

やがて背戸と思う処で左に馬小屋を見た、ことごとくという音は羽目を蹴るのであろう、もうその辺から薄暗くなつて来る。

(貴僧、ここから下りるのでございます、迂りはいたしませぬが、道が酷うございませうからお静に、) という。「

十三

「そこから下りるのだと思われる、松の木の細くツて度外れに背の高い、ひよろひよろしたおよそ五六間上までは小枝一ツもないのがある。その中を潜つたが、仰ぐと梢に出て白い、月の形はここでも別にかわりは無かつた、浮世はどこにあるか十三夜で。

先へ立つた婦人の姿が目さきを放れたから、松の幹に掴まって覗くと、つい下に居た。仰向いて、

(急に低くなりますから気をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたかしら、宜しくば草履とお取交え申しませう。)

立後れたのを歩行悩んだと察した様子、何がさて転げ落ちても早く行つて蛭の垢を

落したさ。

(何、いけませんければ跣足になります分のこと、どうぞお構いなく、嬢様にご心配をかけては済みません。)

(あれ、嬢様ですつて、)とやや調子を高めて、艶麗に笑った。

(はい、ただいまあの爺様が、さよう申しましたように存じますが、夫人でございませぬか。)

(何にしても貴僧には叔母さんくらいな年紀ですよ。まあ、お早くいらつしやい、草履もようござんすけれど、刺がささりますといけません、それにじくじく湿れていてお気味が悪うございましょうから。)と向う向でいいながら衣服の片褸をぐいとあげた。真白なのが暗まぎれ、歩行くと霜が消えて行くような。

ずんずんずんと道を下りる、傍らの叢から、のさのさと出たのは臺で。

(あれ、気味が悪いよ。)というと婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。

(お客様がいらつしやるではないかね、人の足になんか搦まって、贅沢じゃあないか、お前達は虫を吸っていればたくさんだよ。)

貴僧ずんずんいらつしやいませぬ、どうもしはしません。こう云う処ですからあんなも

のまで人懐しゆうございます、厭じやないかね、お前達と友達をみたようで愧しい、あれ
いけませんよ。)

墓はのさのさとまた草を分けて入った、婦人はむこうへずいと。

(さあこの上へ乗るんです、土が柔かで壊えますから地面は歩行かれません。)

いかにも大木の僵れたのが草がくれにその幹をあらわしている、乗ると足駄穿で差
支えがない、丸木だけれどもおそろしく太いので、もつともこれを渡り果てるとたちま
ち流の音が耳に激した、それまでにはよほどの間。

仰いで見ると松の樹はもう影も見えない、十三夜の月はずっと低うなったが、今下りた
山の頂に半ばかかつて、手が届きそうにあぎやかだけれども、高さはおよそ計り知られぬ。
(貴僧、こちらへ。)

といった婦人はもう一息、目の下に立つて待つていた。

そこは早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかかつてここによどみを作っている、川幅
は一間ばかり、水に臨めば音はさまでにもないが、美しさは玉を解いて流したよう、かえ
つて遠くの方で凄じく岩に碎ける響がする。

向う岸はまた一座の山の裾で、頂の方は真暗だが、山の端からその山腹を射る月の光

に照し出された辺からは大石小石、榮螺さざえのようなもの、六尺角に切出したもの、劍つるぎのようなものやら、鞆まりの形をしたのやら、目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水にひたつたのはただ小山のよう。」

十四

「（いい塩あんばい梅に今日は水がふえておりますから、中へ入りませんでもこの上でようございませぬ。）と甲ひたを浸して爪つまさき先を屈かがめながら、雪のような素足で石の盤ばんの上に立っていた。自分達が立った側かわは、かえってこつちの山の裾が水に迫って、ちようど切穴の形になつて、そこへこの石を嵌はめたような詭あつらえ。川上も下流も見えぬが、向うのあの岩山、九十九折つづらおりのような形、流は五尺、三尺、一間ばかりずつ上流の方がだんだん遠く、飛とびとび々に岩をかがつたように隠いんけん見して、いづれも月光を浴びた、銀の鎧よろいの姿、目まのあたり近いのはゆるぎ糸いとを捌さばくがごとく真白ひるがえに翻ひるがえつて。

（結構な流れでございませぬ。）

（はい、この水は源が滝たきでございませぬ、この山を旅するお方は皆みな大風のような音をどこ

かで聞きます。貴僧はこちらへいらつしやる道でお心着きはなさいませんかい。）

さればこそ山蛭の大藪へ入ろうという少し前からその音を。

（あれは林へ風の当るものではございませんので？）

（いえ、誰でもそう申します、あの森から三里ばかり傍道へ入りました処に大滝があるのでございます、それはそれは日本一だそうですが、路が峻しゆうござんすので、十人に一人参つたものはございません。その滝が荒れましたと申しまして、ちようど今から十三年前、恐しい洪水がございました、こんな高い処まで川の底になりましたね、麓の村も山も家も残らず流れてしまいました。この上の洞も、はじめは二十軒ばかりあったのでござんす、この流れもその時から出来ました、ご覧なさいましな、この通り皆な石が流れたのでございませすよ。）

婦人はいつかもう米を精げ果てて、衣紋の乱れた、乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を反して立つた、鼻高く口を結んで目を恍惚と上を向いて頂を仰いだが、月はなお半腹のその累々たる巖を照すばかり。

（今でもこようやって見ますと恐いようでございませす。）と屈んで二の腕の処を洗っている。

(あれ、貴僧あなた、そんな行儀ぎようぎのいいことをしていらしってはお召めしが濡ぬれます、気味が悪うございますよ、すっぱり裸体はだかになつてお洗せんいなさいまし、私が流ながして上げましょう。)

(いえ、)

(いえじやあござんせぬ、それ、それ、お法衣ころもの袖そでが浸ひたるではありませんか、)というといきなりうしろ突然いきなり背後うしろから帯おびに手をかけて、身悶みもたえをして縮ちぢむのを、邪慳じゃけんらしくすっぱり脱ぬいで取とつた。

私は師匠わしが厳きびしかったし、経きやうを読む身体からだじや、肌はださえ脱ぬいだことはついぞ覚えぬ。しかも婦人おんなの前まへ、蝸牛まいまいつぶろが城しろを明け渡わたしたようで、口くちを利きくさえ、まして手足てあしのあがきも出来できず、背中せなかを円まるくして、膝ひざを合あせて、縮ちぢかまると、婦人おんなは脱ぬがした法衣ころもを傍かたわらの枝えだへふわりとかけた。

(お召めしはこうやつておきましよう、さあお背せなを、あれさ、じつとして。お嬢様ぢやうさまとおつしやつて下さいましたお札まがに、叔母おぢいさんが世話せわを焼やくのでござんす、お人の悪い。)といつて片袖かたそでを前齒まへぢばで引ひ上げ、玉たまのような二の腕うでをあからさまに背せなか中ちゆうに乗のせたが、じつと見て、

(まあ、)

(どうかいたしておりますか。)

(痣あざのようになって、一面に。)

(ええ、それでございます、酷ひどい目に逢あいました。)

思い出してもぞツとするて。」

十五

「婦人おんなは驚いた顔をして、

(それでは森の中で、大変でございますこと。旅をする人が、飛驒ひだの山では蛭が降るとい
うのはあすこでござんす。貴僧あなたは拔道まともをご存じないから正面に蛭の巢をお通りなさいまし
たのでございますよ。お生命いのちも冥加みよがなくらい、馬でも牛でも吸い殺すのでございますも
の。しかし疼うずくようにお痒かゆいのでござんしようね。)

(ただいまではもう痛みますばかりになりました。)

(それではこんなものでござりますしては柔やわらかいお肌すりむが擦剥すりむけましょう。)

というと手が綿綿のように障さわった。

それから両方の肩から、背、横腹、臀いしき、さらさら水をかけてはさすつてくれる。

それがさ、骨に通つて冷たいかというところではなかつた。暑い時分じやが、理窟をい
うところではあるまい、私の血が沸いたせい、婦人の温気か、手で洗つてくれる水がい
い工合に身に染みる、もつとも質の佳い水は柔かじやそうな。

その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うとうとする様子で、疵
の痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひとと附ついてゐる婦人の身体で、私は花びらの中
へ包まれたような工合。

山家の者には肖合わぬ、都にも希な器量はいうに及ばぬが弱々しそうな風采じや、背中
を流す中にもはツはツと内証で呼吸がはずむから、もう断ろう断ろうと思ひながら、例
の恍惚で、気はつきながら洗わした。

その上、山の気か、女の香か、ほんのりと佳い薫がする、私は背後でつく息じやろうと
思つた。

上人 はちよつと句切つて、

「いや、お前様お手近じや、その明を搔き立つてもらいたい、暗いと怪しからぬ話じや、
ここらから一番野面で遣つてよう。」

まくら 枕を並べた上人の姿も臙げに明は暗くなつていた、早速燈心を明くすると、上人は微

笑みながら続けたのである。

「さあ、そうやっていつの間にも現とも無しに、こう、その不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被ったから吃驚、石に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思うとたんに、女の手が背後から肩越しに胸をおさえたのでしっかりつかまった。

（貴僧、お傍に居て汗臭うはござんせぬかい、とんだ暑がりなんでございますから、こうやっておりましてもこんなでございますよ。）という胸にある手を取ったのを、慌てて放して棒のように立った。

（失礼、）

（いいえ誰も見ておりはしませんよ。）と澄して言う、婦人もいつの間にか衣服を脱いで全身を練絹のように露していたのじや。

何と驚くまいことか。

（こんなに太つておりますから、もうお愧しいほど暑いのでございます、今時は毎日二度も三度も来てはこうやって汗を流します、この水がございませんかったらどういたしましよう、貴僧、お手拭。）といつて絞ったのを寄越した。

(それでおみ足をお拭きなさいまし。)

いつの間にか、体はちゃんと拭いてあった、お話し申すも恐多いが、はははははは。」「

十六

「なるほど見たところ、衣服を着た時の姿とは違うて肉つきの豊かな、ふっくりとした皮膚が悪うござんす。ちようどようございますから私も体を拭きましょう。」

と姉弟が内端話をするような調子。手をあげて黒髪をおさえながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りながら立った姿、ただこれ雪のようなのをかかる霊水で清めた、こういう女の汗は薄紅になつて流れよう。

ちよいちよいと櫛を入れて、

(まあ、女がこんなお転婆をいたしまして、川へ落こちたらどうしましょう、川下へ流れて出ましたら、村里の者が何と見ましようね。)

(白桃の花だと思ひます。)&ふと心付いて何の気もなしにいうと、顔が合うた。

すると、さも嬉しうに莞爾してその時だけは初々しゅう年紀も七ツ八ツ若やぐばかり、処女の羞を含んで下を向いた。

私はそのまま目を外らしたが、その一段の婦人の姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら向う岸の※に濡れて黒い、滑かな大きな石へ蒼味を帯びて透通つて映るように見えた。するとね、夜目で判然とは目に入らなんだが地体何でも洞穴があるとみえる。ひらひらと、こちらからもひらひらと、ものの鳥ほどはあろうという大蝙蝠が目を遮った。

(あれ、いけないよ、お客様があるじゃないかね。)

不意を打たれたように叫んで身悶えをしたのは婦人。

(どうかなさいましたか、) もうちゃんと法衣を着たから氣丈夫に尋ねる。

(いいえ、)

といったばかりできまりが悪そうに、くるりと後向になった。

その時小犬ほどな鼠色の小坊主が、ちよこちよことやって来て、あなやと思うと、崖から横に宙をひよいと、背後から婦人の背中へぴったり。

裸体の立姿は腰から消えたようになって、抱つたものがある。

(畜生、お客様が見えないかい。)

と声に怒を帯びたが、

(お前達は生意気だよ、)と激しくいいさま、腋の下から覗こうとした件の動物の天窗を振りかえ
振り返りさまにくらわしたで。

キツキツというて奇声を放った、件の小坊主はそのまま後飛びにまた宙を飛んで、今まで法衣をかけておいた、枝の尖へ長い手で釣し下ったと思うと、くるりと釣瓶覆に上へ乗って、それなりさらさらと木登をしたのは、何と猿じやあるまいか。

枝から枝を伝うと見えて、見上げるように高い木の、やがて梢まで、かさかさがさり。まばらに葉の中を透して月は山の端を放れた、その梢のあたり。

婦人はものに拗ねたよう、今の悪戯、いや、毎々、墓と蝙蝠と、お猿で三度じや。その悪戯に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様には得てある凶じや。

本当に怒り出す。

といった風情で面倒臭そうに衣服を着ていたから、私は何にも問わずに小さくなって黙って控えた。」

十七

「優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のある、馴なれなれ々こたえしくて犯し易やすからぬ品のいい、いかなることにもいざとなれば驚くに足らぬという身に応こたえのあるといったような風の婦人おんな、かく嬌きょうしん 暎んを発してはきつといいことはあるまい、今この婦人おんなに邪じゃけ慳んにされては木から落ちた猿同然じゃと、おつかなびつくりで、おずおず控えていたが、いや案ずるより産うむが安い。

（貴僧あなた、さぞおかしかったでござんしょうね、）と自分でも思い出したように快く微笑ほほえみながら、

（しようがないのでございますよ。）

以前と変らず心安くなつた、帯も早やしめたので、

（それでは家へ帰りましょう。）と米磨桶こめとぎおけを小腋こわきにして、草履ぞうりを引ひかけてつと崖がけへ上のぼつた。

（お危あぶうござんすから。）

（いえ、もうだいぶ勝手が分つております。）

ずツと心得こころえた意つもりじやつたが、さて上あがる時見ると思おもいの外ほか上うへまでは大層高い。

やがてまた例の木の丸太を渡わたるのじやが、さつきもいった通り草のなかに横倒れになつてゐる木地がこうちようど鱗うろこのようたしえで、譬たとへにもよくいうが松の木は蝮うわばみに似にてゐるで。

殊ことに崖を、上の方へ、いい塩梅あんばいに蜿うねつた様子が、とんだものに持つて来いなり、およ

そののくらしいな胴どうなか中の長虫がと思おもうと、頭と尾を草に隠かくして、月あかりに歴然ありありとそれ。

山路の時を思おもい出ですと我ながら足あしが竦すくむ。

婦人おんなは深切うしろきつこに後うしろを氣遣きづこうては氣を付けてくれる。

(それをお渡りなさいます時、下を見てはなりません。ちようどちゆうとでよツぼど谷が深いのでございませうから、目が廻まうと悪わるうござんす。)

(はい。)

愚ぐ図ず愚ぐ図ずしてはいられぬから、我身わがみを笑わらいつけて、まず乗のつた。引ひかかるよう、刻きざが入いれてあるのじやから、氣たしかさえ確あなら足駄あしだでも歩行あるかれる。

それがさ、一件たじやから耐たまらぬて、乗のるとこうぐらぐらして柔かにずると這はいそうじやから、わつというひんまたと引跨ひんまたいで腰こしをどさり。

(ああ、意氣地いきじはございませぬねえ。足駄あしだでは無理でございませう、これとお穿はき換かえ

なさいまし、あれさ、ちゃんということをおくんですよ。)

私わしはそのさつきから何なんとなくこの婦人おんなに畏敬いけいの念が生じて善か悪か、どの道命令されるように心得たから、いわるるままに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人おんなは足駄を穿きながら手を取ってください。

たちまち身が軽くなつたように覚えて、訳わけなく後うしろに従つて、ひよいとあの孤家ひとつやの背戸せどの端はたへ出た。

出會頭であいがしらに声を懸かけたものがある。

(やあ、大分手間が取れると思つたに、ご坊様ぼうさま旧の体で歸らつしやつたの。)

(何をいうんだね、小父様家の番はどうおしだ。)

(もういい時分じや、また私も余り遅おそうなつては道が困るで、そろそろ青を引出して支度したぐしておこうと思つてよ。)

(それはお待遠まちどおでござんした。)

(何さ、行つてみさつしやいご亭主ていしゆは無事じや、いやなかなか私わしが手には口説落くどきされなんだ、ははははは。)と意味もないことを大おお笑わらいして、親仁おやじは厩うまやの方へてくてくと行つた。

白痴はおなじ処になお形を存している、海月も日にあたらねば解けぬとみえる。」

十八

「ヒイイン！ しっ、どうどうどうと背戸を廻る鱧爪の音が縁へ響いて親仁は一頭の馬を門前へ引き出した。

轡頭を取つて立ちはだかり、

（嬢様そんならこのままで私参りやる、はい、ご坊様にたくさんご馳走して上げなされ。）

婦人は炉縁に行燈を引附け、俯向いて鍋の下を燻していたが、振仰ぎ、鉄の火箸を持つた手を膝に置いて、

（ご苦労でござんす。）

（いんえご懇には及びましねえ。しっ！）と荒縄の綱を引く。青で蘆毛、裸馬で逞しいが、鬣の薄い牡じゃわい。

その馬がさ、私も別に馬は珍しゆうもないが、白痴殿の背後に畏つて手持不沙汰じゃか

ら今引いて行こうとする時縁側へひらりと出て、

(その馬はどこへ。)

(おお、諏訪の湖の辺まで馬市へ出しやすのじや、これから明朝お坊様が歩行かつしやる山路を越えて行きやす。)

(もし、それへ乗って今からお遁げ遊ばすお意ではないかい。)

おんなは慌だしく遮って声を懸けた。

(いえ、もつたない、修行の身が馬で足休めをしましよなぞとは存じませぬ。)

(何でも人間を乗つけられそうな馬じゃあござらぬ。お坊様は命拾いをなされたのじやで、大人しゆうして嬢様の袖の中で、今夜は助けて貰わつしやい。さようならちよつくら行つて参りますよ。)

(あい。)

(畜生。) といったが馬は出ないわ。びくびくと蠢いて見える大な鼻面をこちらへ捻じ向けてしきりに私等が居る方を見る様子。

(どうどうどう、畜生これあだけた獣じゃ、やい!)

右左にして綱を引張つたが、脚から根をつけたごとくにぬつくと立っていてびくともせ

ぬ。

親仁おやし大いに苛立いらだつて、叩たたいたり、打ぶつたり、馬の胴体について二三度ぐるぐると廻まわつたが少しも歩かぬ。肩でぶつつかるようになして横よこ腹はらへ体をあてた時、ようよう前足を上げたばかりまた四脚よつあしを突張つっぱり抜く。

(嬢様嬢様。)

と親仁おやしが喚わめくと、婦人おんなはちよつと立たつて白い爪つまさきをちよろちよろと真黒まっくろに煤すすけた太い柱たてを楯たてに取とつて、馬の目の届かぬほどに小隠こかくれた。

その内腰うちこしに挟はさんだ、煮染にじめたような、なえなえの手拭てぬぐいを抜ぬいて克明こくめいに刻きんだ額の皺しわの汗あせを拭ふいて、親仁おやしはこれでよしという気組きぐみ、再び前へ廻まわつたが、旧もとによつて貧乏動びんぼうゆるぎもしないので、綱つなに両手をかけて足を揃そろえて反返そりかえるようになして、うむと総身そうみに力を入れいれた。とたんにどうじやい。

凄すさまじく嘶いなないて前足を両方中空なかぞらへ翻ひるがえしたから、小さな親仁おやしは仰向ひつけに引ひくりかえつた、ずどんどう、月夜に砂煙すながぱつと立たつ。

白痴ばかにもこれは可笑おかしかつたらう、この時ばかりじゃ、真直まっすぐに首くちびるを据すえて厚い唇くちびるをばくりと開あけた、大粒おおつぶな歯むきだを露出むきだして、あの宙あおへ下おげている手を風で煽あおるように、はらり

はらり。

(世話が焼けることねえ、)

婦人は投げるようにいつて草履を突かけて土間へついと出る。

(嬢様勘違いさつしやるな、これはお前様ではないぞ、何でもはじめからそこなお坊様に目をつけたつけよ、畜生俗縁があるだツペいわさ。)

俗縁は驚きたい。

すると婦人が、

(貴僧ここへいらつしやる路で誰にかお逢いなさりはしませんか。)

十九

「(はい、辻の手前で富山の反魂丹売に逢いましたが、一足先にやつぱりこの路へ入りました。)

(ああ、そう。)と会心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、およそ耐らなく可笑しいと
 いったはしたない風采で。

極めて与し易う見えたので、

(もしや此家へ参りませなんだでございませうか。)

(いいえ、存じません。) という時たちまち犯すべからざる者になったから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を払うている馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

(しようがないねえ、) といいながら、かなぐるようにして、その細帯を解きかけた、片端が土へ引こうとするのを、掻取つてちよいと猶予う。

(ああ、ああ。) と濁つた声を出して白痴が件のひよろりとした手を差向けたので、婦人は解いたのを渡してやると、風呂敷を寛げたような、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて宝物を守護するようじや。

婦人は衣紋を抱き合せ、乳の下でおさえながら静に土間を出て馬の傍へつと寄つた。

私はただ呆気にと取られて見ていると、爪立をして伸び上り、手をしなやかに空ぎまににして、二三度鬣を撫でたが。

大きな鼻頭の正面にすつくりと立った。丈もすらすらと急に高くなつたように見えた、婦人は目を据え、口を結び、眉を開いて恍惚となつた有様、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風はとみに失せて、神か、魔かと思われる。

その時裏の山、向うの峰、左右前後にすくすくとあるのが、一ツ一ツ嘴くちばしを向け、頭かしらを擡もたげて、この一落いちらくの別天地、親仁おやじを下しも手に控まもえ、馬うまに面あたしてイたんだ月下げつげの美女みよめの姿すがたを差さ覗ぞくがごとく、陰々いんいんとして深山みやまの氣きが籠こもつて来た。

生なまぬるい風かぜのような氣勢けいはいがすると思うと、左の肩かたから片膚かたはだを脱はいだが、右の手みぎてを脱はして、前まへへ廻まわし、ふくらんだ胸むねのあたりで着きていたその単衣ひとえを円まるけて持ち、霞かすみも絡まわぬ姿すがたになつた。

馬うまは背せな、腹はらの皮かわを弛ゆるめて汗あせもしとどに流ながれんばかり、突張つっぱつた脚あしもなよなよとして身みぶる震いをしたが、鼻面はなづらを地ちにつけて一ひとつ掴つかの白泡しろあわを吹出ふきだしたと思うと前足まへあしを折よろうとする。

その時とき、頤あごの下したへ手をかけて、片手ひとてで持つていた単衣ひとえをふわりと投なげて馬うまの目めを蔽おほうが否いなや、兎うさぎは躍おどつて、仰向あおむけざまに身みを翻ひるがえ、妖氣ようきを籠こめて朦朧もうろうとした月つきあかりに、前足まへあしの間に膚はだが挟はさまれたと思うと、衣きぬを脱はして搔取かいてりながら下腹したはらをつと潜くぐつて横よこに抜ぬけて出でた。
親仁おやじは差心さしこころ得えたものと見える、この機きつかけに手綱たづなを引ひいたから、馬うまはすたすたと健けんき脚あしを山路やまじに上げた、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、——見る間に眼界まを遠とほざかる。

おんな 婦人は早や衣服を引かけて縁側へ入つて来て、突然帯を取ろうとすると、白痴は惜しそうに押えて放さず、手を上げて、婦人の胸を圧えようとした。

邪慳に払い退けて、きつと睨んで見せると、そのままがつくりと頭を垂れた、すべての光景は行燈の火も幽に幻のように見えたが、炉にくべた柴がひらひらと炎先を立てたので、婦人はつと走つて入る。空の月のうらを行くと思うあたり遙に馬子歌が聞えたて。「

二十

「さて、それからご飯の時じや、膳には山家の香の物、生姜の漬けたのと、わかめを茹でたの、塩漬の名も知らぬ蕈の味噌汁、いやなかなか人参と干瓢どころではござらぬ。

品物は侘しいが、なかなかのお手料理、餓えてはいるし、冥加至極なお給仕、盆を膝に構えてその上に肱をついて、頬を支えながら、嬉しそうに見ていたわ。

縁側に居た白痴は誰も取合ぬ徒然に堪えられなくなったものか、ぐたぐたと膝行出して、婦人の傍へその便々たる腹を持つて来たが、崩れたように胡坐して、しきりにこ

う我が膳を視めて、指をした。

(うううう、うううう。)

(何でございますね、あとでお食んなさい、お客様じゃありませんか。)

白痴は情ない顔をして口を曲めながら頭を掉つた。

(厭？ しょうがありませんね、それじゃご一所に召しあがれ。貴僧、ご免を蒙りますよ。)

よ。)

私は思わず箸を置いて、

(さあどうぞお構いなく、とんだご雑作を頂きます。)

(いえ、何の貴僧。お前さん後ほどに私と一所にお食べなさればいいのに。困った人でござ

いますよ。)とそらさぬ愛想、手早くおなじような膳を拵えてならべて出した。

飯のつけようも効々しい女房ぶり、しかも何となく奥床しい、上品な、高家の

風がある。

白痴はどんよりした目をあげて膳の上を睨めていたが、

(あれを、ああ、ああ、あれ。)といつてきよろきよろと四辺を

婦人はじつと瞻つて、

（まあ、いいじゃないか。そんなものはいつでも食られます、今夜はお客様がありますよ。）

（うむ、いや、いや。）と肩腹を揺すつたが、ベそを搔いて泣出しそう。

婦人は困じ果てたらしい、傍のものの気の毒さ。

（嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたがよいではござりませんか。私にお氣遣はかえつて心苦しゅうござります。）と慇懃にいうた。

婦人はまたもう一度、

（厭かい、これでは悪いのかい。）

白痴が泣出しそうにすると、さも怨めしげに流眊に見ながら、こわれごわれになつた戸棚の中から、鉢に入つたのを取り出して手早く白痴の膳につけた。

（はい。）と故とらしく、すねたようにいつて笑顔造。

はてさて迷惑な、こりや目の前で黄色蛇の旨煮か、腹籠の猿の蒸焼か、災難が軽うても、赤蛙の干物を大口にしゃぶるであらうと、そつと見ていると、片手に腕を持ちながら掴出したのは老沢庵。

それもさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたらうという握太なのを横銜え

にしてやらかすのじや。

婦人おんなはよくよくあしらいかねたか、盗むぬすように私わしを見てさつと顔を赭あからめて初心らしい、そんな質たちではあるまいに、羞はずかしげに膝ひざなる手拭てぬぐいの端はしを口にあてた。

なるほどこの少年はこれであろう、身体からだは沢庵色たくわんいろにふとっている。やがてわけもなく餌え食じきを平たいらげて湯ともいわず、ふツふツと大儀たいぎそうに呼吸いきを向うへ吐つくわき。

(何でございますか、私は胸むねに支つかえましたようで、ちつとも欲しくございせんから、また後のちほどに頂いただききましょう、)

と婦人おんな自分は箸も取らずに二ツの膳を片づけてな。」

二十一

「しばらくしよんぼりしていたつけ。

(貴僧あなた、さぞお疲労つかれ、すぐにお休ませ申しませうか。)

(難ありがと有う存じます、まだちつとも眠くはござりません、さつき体を洗いましたので草くたび臥れもすつかり復なほりました。)

(あの流れはどんな病にでもよく利きます、私が苦勞をいたしまして骨と皮ばかりに体が朽れましても、半日あすこにつかつておりますと、水々しくなるのでございますよ。もつともあのこれから冬になりまして山がまるで氷つてしまい、川も岨も残らず雪になりまして、貴僧が行水を遊ばしたあすこばかりは水が隠れませんが、そうしていきりが立ちます。鉄砲疵のございます猿だの、貴僧、足を折った五位鷲、種々なものが浴みに参りますからその足跡で岨の路が出来ますくらい、きつとそれが利いたのでございましょう。

そんなにございませぬければこうやつてお話をなすつて下さいまし、寂しくつてなりませぬ、本当にお愧しゆうございしますが、こんな山の中に引籠つておりますと、ものをいうことも忘れましようで、心細いのでございますよ。

貴僧、それでもお眠ければご遠慮なさいませぬえ。別にお寢室と申してもございませぬがその代り蚊は一ツも居ませぬよ、町方ではね、上の洞の者は、里へ泊りに来た時蚊帳を釣つて寝かそうとすると、どうして入るのか解らないので、梯子を貸せいと喚いたと申して廻るのでございます。

たと朝寐を遊ばしても鐘は聞えず、鶏も鳴きませぬ、犬だつておりませぬからお心やす安うござんしょう。

この人も生れ落ちるとこの山で育ったので、何にも存じません代り、気のいい人でちつともお心こころ置おきはないのでござんす。

それでも風俗ふうぶつのかわつた方がいらつしやいますと、大事にしてお辞儀じぎをすることだけは知つてでございしますが、まだご挨拶あいさつをいたしませんね。この頃ごろは体がだるいと見えてお情なまけさんになんなすつたよ。いいえ、まるで愚おろかなものでございませぬ、何でもちやんと心こころ得えております。

さあ、ご坊様にご挨拶をなすつて下さい。まあ、お辞儀をお忘れかい。と親しげに身を寄せて、顔を差し覗のぞいて、いそいそしていうと、白痴ばかはふらふらと両手をついて、ぜんまいが切れたようにがっくり一礼。

(はい、) といつて私も何か胸むねが迫せまつて頭つむりを下くだげた。

そのままその俯向うつむいた拍子ひょうしに筋が抜けたらしい、横に流れようとするのを、婦人おんなは優しゅう扶たすけ起して、

(おお、よくしたねえ。)

天晴あつぱれといいたそうな顔色かおつきで、

(貴僧あなた、申せば何でも出来ましようと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者の手

でもあの水でも復りませなんだ、両足が立ちませんのでございますから、何を覚えさしましても役には立ちません。それにご覧なさいまし、お辞儀一ツいたしますさえ、あの通り大儀らしい。

ものを教えますと覚えますのにさぞ骨が折れて切のうござんしよう、体を苦しませるだけだと存じて何にもさせないで置きますから、だんだん、手を動かす働も、ものをいうことも忘れしました。それでもあの、謡が唄えますわ。二ツ三ツ今でも知っておりますよ。さあお客様に一ツお聞かせなさいましなね。」

白痴は婦人を見て、また私が顔をじろじろ見て、人見知をするといった形で首を振つた。」

二十二

「左右して、婦人が、励ますように、賺すようにして勧めると、白痴は首を曲げてかの臍を弄びながら唄った。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、

あわぢ
拾遣りたや足袋添えて。

(よく知つておりましたよ、)と婦人は聞き澄して莞爾する。

不思議や、唄つた時の白痴の声はこの話をお聞きなさるお前様はもとよりじやが、私も推量したとは月鼈雲泥、天地の相違、節廻し、あげさげ、呼吸の続くところから、第一その清らかな涼しい声という者は、到底この少年の咽喉から出たものではない。まづ前の世のこの白痴の身が、冥土から管でそのふくれた腹へ通わして寄越すほどに聞えませんでしたよ。

私は畏つて聞き果てると、膝に手をついたツきりどうしても顔を上げてそなたな男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤして、はらはらと落涙した。

婦人は目早く見つけたそうで、

(おや、貴僧、どうかなさいましたか。)

急にものもいわれなんだが漸々、

(はい、なかに、変つたことでもござりませぬ、私も嬢様のことは別にお尋ねしませんから、貴女も何にも問うては下さりませぬ。)

と仔細は語らずただ思い入つてそう言うたが、実は以前から様子でも知れる、金釵

玉簪をかざし、蝶衣を纏うて、珠履を穿たば、正に驪山に入つて、相抱くべき豊肥妖艶の人が、その男に對する取廻しの優しさ、隔なさ、深切さに、人事ながら嬉しくて、思わず涙が流れたのじや。

すると人の腹の中を読みかねるような婦人ではない、たちまち様子を悟つたかして、(貴僧はほんとうにお優しい。)といつて、得も謂われぬ色を目に湛えて、じつと見た。私も首を低れた、むこうでも差俯向く。

いや、行燈がまた薄暗くなつて参つたようじやが、恐らくこりや白痴のせいじやて。その時よ。

座が白けて、しばらく言葉が途絶えたうちに所在がないので、唄うたいの太夫、退屈をしたとみえて、顔の前の行燈を吸い込むような大欠伸をしたから。

身動きをしてな、

(寝ようちやあ、寝ようちやあ、)とよたよた体を持扱うわい。

(眠うなつたのかい、もうお寝か。)といったが坐り直つてふと気がついたように四辺をみた。戸外はあたかも真昼のよう、月の光は開け拡げた家の内へはらはらとさして、紫陽花の色も鮮麗に蒼かった。

(貴僧あなたももうお休みなさいますか。)

(はい、ご厄介やっかいにあいなります。)

(まあ、いま宿やどを寝かします、おゆつくりなさいましな。戸外おもてへは近うござんすが、夏は広い方が結句けつこ宜うございましょう、私わたしどもは納戸なんどへ臥ふせりますから、貴僧あなたはここへお広くお寛くわんぎがようござんす、ちよいと待つて。)といいかけてつツと立ち、つかつかと足早あしはやに土間つちまへ下りた、余り身のこなしが活澆かつぱつであつたので、その拍子ひたしに黒髪くろかみが先を巻いたまま項うなじへ崩くずれた。

鬢びんをおさえて戸かどにつかまつて、戸外おもてを透すかしたが、独ひとり言ごとをした。

(おやおやさっきの騒さわぎで櫛くしを落おしたそうな。)

いかさま馬うまの腹はらを潜くぐつた時ときじや。」

二十三

この折まげから下の廊下ろうかに登あし音がして、静しずかに大跨おおまたに歩ある行るいたのが、寂せきとしてゐるからよく。

やがて小用を達した様子、雨戸をばたりと開けるのが聞えた、手水鉢へ柄杓の響。

「おお、積った、積った。」と呟いたのは、旅籠屋の亭主の声である。

「ほほう、この若狭の商人はどこかへ泊つたと見える、何か愉快い夢でも見ているかな。」

「どうぞその後を、それから。」と聞く身には他事をいううちが牴牾しく、膠もなく続きを促した。

「さて、夜も更けました、」といつて旅僧はまた語出した。

「たいてい推量もなさるであろうが、いかに草臥れておつても申上げたような深山の孤家で、眠られるものではない、それに少し気になって、はじめの内私を寝かさなかつた事もあるし、目は冴えて、まじまじしていたが、さすがに、疲が酷いから、心は少しぼんやりして来た、何しろ夜の白むのが待遠でならぬ。

そこではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼みにして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり経つたものをと、怪しんだが、やがて気が付いて、こういう処じや山寺どころではないと思うと、にわかにな心細くなつた。

その時は早や、夜がものに譬えると谷の底じや、白痴がだらしのない寐息も聞えなくな

ると、たちまち戸の外にももの気勢がしてきた。

獣の登音のようで、さまで遠くの方から歩行いて来たのではないよう、猿も、蝨も、居る処と、気休めにまず考えたが、なかなかどうして。

しばらくすると今そやつが正面の戸に近いたなと思つたのが、羊の鳴声になる。

私はその方を枕にしていたのじやから、つまり枕頭の戸外じやな。しばらくすると、右手のかの紫陽花が咲いていたその花の下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むささびか知らぬがきツきツとって屋の棟へ、やがておよそ小山ほどであろうと気取られるのが胸を圧すほどに近いて来て、牛が鳴いた、遠くの彼方からひたひたと小刻に駈けて来るのは、二本足に草鞋を穿いた獣と思われた、いやさまさまにむらむらと家のぐるりを取巻いたようで、二十三十のもの鼻息、羽音、中には囁いているのがある。あたかも何よ、それ畜生道の地獄の絵を、月夜に映したような怪しの姿が板戸一枚、魍魎息を凝すと、納戸で、

(うむ、) といって長く呼吸を引いて一声、靨れたのは婦人じや。

(今夜はお客様があるよ。) と叫んだ。

(お客様があるじゃないか。)

としばらく経つて二度目のははつきりと清すずしい声。

極めて低こゝえ声で、

(お客様があるよ。)といつて寝返る音がした、更に寝返る音がした。

戸の外のものの氣勢けはいは動揺どよめきを造るがごとく、ぐらぐらと家が揺ゆらめいた。

私は陀羅尼を呪じゆした。

若不順にやくふじゆんがしゆ我呪のうらんせつほうじや 恼乱のうらん説法者

頭破ずはさしちぶん作七分 如阿梨樹枝によありじゆし

如殺父母罪によしふもぎい 亦如厭油殃やくによおうゆおう

斗秤欺誑人としやうごうにん 調達破僧罪じやうだつはそうざい

犯此法師者ほんしほつししや 当獲如是殃とうぎやくによぜおう

と一心不乱、さつと木の葉を捲まいて風が南みなみへ吹いたが、たちまち静しずまり返った、夫婦が閨ねやもひツそりした。」

「翌日また正午頃、里近く、滝のある処で、昨日馬を売りに行った親仁の帰りに逢うた。ちようど私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送ろうと思つていたところで。」

実を申すとここへ来る途中でもその事ばかり考える、蛇の橋も幸になし、蛭の林もなかつたが、道が難渋なにつけても、汗が流れて心持が悪いにつけても、今更行脚もつまらない。紫の袈裟をかけて、七堂伽藍に住んだところで何ほどのこともあるまい、活仏様 じゃというて、わあわあ拝まれば人いきれで胸が悪くなるばかりか。

ちとお話もいかがじゃから、さつきはことを分けていませなんだが、昨夜も白痴を寐かしつけると、婦人がまた炉のある処へやつて来て、世の中へ苦勞をしに出ようより、夏は涼しく、冬は暖い、この流に一所に私の傍においでなさいというてくれるし、まだまだそればかりでは自分に魔が魅したようじゃけれど、ここに我身で我身に言訳が出来るというのは、しきりに婦人が不便でならぬ、深山の孤家に白痴の伽をして言葉も通ぜず、日を経るに従うてものをいうことさえ忘れるような気がするというは何たる事！

殊に今朝も東雲に袂を振り切つて別れようとする、お名残惜しや、かような処にこ

うやつて老朽おいくちる身の、再びお目にはかかられまい、いきさ小川の水になりとも、どこぞで白桃しろももの花が流れるのをご覧になったら、私の体が谷川に沈んで、ちぎれちぎれになったことと思え、といつて悄しおれながら、なお深切しんせつに、道はただこの谷川の流れに沿うて行きさえすれば、どれほど遠くても里に出らるる、目の下近く水が躍おどって、滝になつて落つるのを見たら、人家が近づいたと心を安んずるように、と気をつけて、孤家ひとつやの見えなくなつた辺あたりで、指ゆびさしをしてくれた。

その手と手を取交とりかわすには及ばずとも、傍そばにつき添そつて、朝夕の話対手はなしあいてきのこと、葷せんの汁でご膳ぜんを食べたり、私わしが櫓ほだを焚たいて、婦人おんなが鍋なべをかけて、私わしが木の実このみを拾みつて、婦人おんなが皮を剥むいて、それから障しょうじ子の内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川で二人して、その時の婦人おんなが裸体はだかになつて私わしが背中へ呼吸いきが通かよつて、微妙びみょうな薫かおりの花びらに暖あたかに包あまれたら、そのまま命が失せてもいい！

滝の水を見るにつけても耐たえ難がたいのはその事であつた、いや、冷汗ひやあせが流れますて。

その上、もう気がたるみ、筋すじが弛ゆるんで、早はや歩ある行くのに飽あきが来て、喜こばねばならぬ人家が近づいたのも、たかがよくされて口の臭くさい婆ばあさんに沝ふるま茶まを振舞ふるまわれるのが関せきの山と、里へ入るのも厭いやになつたから、石の上へ膝ひざを懸かけた、ちようど目の下にある滝じやつた、

これがさ、後に聞くと女夫滝めおとだきと言うそうで。

真中にまず鰐鮫わにざめが口をあいたような先のとがった黒い大巖おおいわが突出つきでしていると、上から流れて来るさつと瀬せの早い谷川が、これに当つて両に岐れて、およそ四丈ばかりの滝になつてどつと落ちて、また暗碧あんぺきに白布しろぬのを織つて矢を射るように里へ出るのじゃが、その巖にせかれた方は六尺ばかり、これは川の一幅ひとはばを裂いて糸も乱れず、一方は幅が狭い、三尺くらい、この下には雑多な岩が並ぶとみえて、ちらちらちらと玉の簾すだれを百千に砕いたよう、件の鰐鮫わにざめの巖に、すれつ、縫もつれつ。」

二十五

「ただ一筋ひとすじでも巖を越して男滝おたきに縫すがりつこうとする形、それでも中を隔へだてられて末までは雫しずくも通わぬので、揉もまれ、揺られて具つぐさに辛苦しんくを嘗なめるといふ風情ふぜい、この方は姿も窈やつれかたち容も細かたつて、流るる音さえ別様に、泣くか、怨うらむかとも思われるが、あわれにも優しい女め滝だきじゃ。」

男滝の方はうらはらで、石を砕き、地を貫つらぬきく勢いき、堂々たる有あり様さまじゃ、これが二つ件くだんの

巖に当つて左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸みて、女滝の心を砕く姿は、男の膝に取ついで美女が泣いて身を震わすようで、岸に居てさえ体がわななく、肉が跳る。ましてこの水上は、昨日孤家の婦人と水を浴びた処と思うと、気のせいかその女滝の中に絵のようなかの婦人の姿が歴々、と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思うとまた浮いて、千筋に乱るる水とともにその膚が粉に砕けて、花片が散込むような。あなやと思ふと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足も全き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱつと刻まれ、あつと見る間にまたあらわれる。私は耐らず真逆に滝の中へ飛込んで、女滝をしかと抱いたとまで思った。気がつくくと男滝の方はどうどうと地響打たせて。山彦を呼んで轟いて流れている。ああその力をもつてなぜ救わぬ、儘よ！

滝に身を投げて死のうより、旧の孤家へ引返せ。汚らわしい欲のあればこそこうなつた上に躊躇するわ、その顔を見て声を聞けば、かれら夫婦が同衾するのに枕を並べて差支えぬ、それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりはよほどのましじやと、思切つて戻ろうとして、石を放れて身を起した、背後から一ツ背中を叩いて、

(やあ、ご坊様。)といわれたから、時が時なり、心も心、後暗いので喫驚して見ると、閻王の使ではない、これが親仁。

馬は売ったか、身軽になつて、小さな包みを肩にかけて、手に一尾の鯉こいの、鱗うろこは金色なる、澹刺はつらつとして尾の動きそうな、鮮あたらしい、その丈三尺ばかりなのを、願あざとに藁わらを通して、ぶらりと提げていた。何んにも言わず急にもものもいわれないで瞻みまると、親仁おやしはじつと顔を見たよ。そうしてにやにやと、また一通りの笑い方ではないて、薄気味うすきみの悪い北叟ほくそえみ笑をして、

(何をしてござる、ご修行の身が、このくらの暑あつさで、岸に休んでいさつしやる分ではあんめえ、一生懸命いっしょうけんめいに歩行あるかつしやりや、昨夜ゆうべの泊とまりからここまではたった五里、もう里へ行つて地藏様を拝まつしやる時刻じや。

何じやの、己おらが嬢様おもいに念かかが懸ほんつて煩惱ぼんのうが起きたのじやの。うんにや、秘かくさつしやるな、おらが目は赤くツても、白いか黒いかはちゃんと見える。

地体じたい並なみのものならば、嬢様おらの手が触さわつてあの水を振舞ふるまわれて、今まで人間でいようはずがない。

牛か馬か、猿か、蟄ひきか、蝙蝠こうもりか、何にせい飛んだか跳ねたかせねばならぬ。谷川から上つて来さした時、手足も顔も人じやから、おらあ魂消たまげたくらい、お前様それでも感心こころざしに志が堅固けんこじやから助かつたようなものよ。

何と、おらが曳ひいて行いつた馬を見さしつたろう。それで、孤家ひとりやへ来さつしやる山路やまみちで
富山とやまの反魂丹はんこんたん売うりに逢あわしつたというではないか、それみさつせい、あの助平野郎すけべいやろう、
とうに馬になつて、それ馬市おあしで錢あしになつて、お錢あしが、そうらこの鯉こいに化けた。大好物で晩
飯ばんの菜さいになさる、お嬢様おぢやうさまを一体何じやと思わつしやるの。」

わたし
私は思おもわず遮さへぎつた。

「お上しやうじん人にん？」

二十六

上人うなずは頷うなずきながら呟つぶやいて、

「いや、まず聞きかつしやい、かの孤家ひとりやの婦人おんなというは、旧もとな、これも私わたしには何かの縁えんが
あつた、あの恐おそしい魔ま処じよへ入いらうという岐道そばみちの水みづが溢あふれた往来わらいで、百姓ひやくしやうが教おしえて、あす
こはその以前いぜん医者いしやの家いへであつたというたが、その家の嬢様おぢやうさまじや。

何でも飛驒ひだ一円いちえん当時たうじ変かつたことも珍めづらしいこともなかつたが、ただ取とり出いでていう不思議ふしぎ
議ぎはこの医者いしやの娘むすめで、生まれると玉たまのよう。

母親殿は頬板のふくれた、眦の下った、鼻の低い、俗にさし乳というあの毒々しい左右の胸の房を含んで、どうしてあれほど美しく育ったものだろうという。

昔から物語の本にもある、屋の棟へ白羽の征矢が立つか、さもなければ狩倉の時貴人のお目に留って御殿に召出されるのは、あんなのじやと噂が高かった。

父親の医者というのは、頬骨のどがった髻の生えた、見得坊で傲慢、その癖でもじや、もちろん田舎には刈入の時よく稲の穂が目に入ると、それから頬う、脂目、赤目、流行目が多いから、先生眼病の方は少し遣ったが、内科と来てはからツペた。外科なんと来た日にやあ、鬢附へ水を垂らしてひやりと疵につけるくらいなところ。

鯛の天窓も信心から、それでも命数の尽きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木齋の居ない土地、相応に繁盛した。

殊に娘が十六七、女盛となつて来た時分には、薬師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたというて、信心渴仰の善男善女？ 病男病女が我も我もと詰め懸ける。

それというのが、はじめりはかの嬢様が、それ、馴染の病人には毎日顔を合せるところから愛想の一つも、あなたお手が痛みますかい、どんなでございます、と行って手先へ柔かな掌が障ると第一番に次作兄いという若いの(りようまちす)が全快、お苦しそう

などいつて腹をさすつてやると水あたりの差込の留まったのがある、初手は若い男ばかりに利いたが、だんだん老人にも及ぼして、後には婦人の病人もこれで復る、復らぬまでも苦痛が薄らぐ、根太の膿を切つて出すさえ、錆びた小刀で引裂く医者殿が腕前じゃ、病人は七顛八倒して悲鳴を上げるのが、娘が来て背中へびつたりと胸をあてて肩を押えていると、我慢が出来るといったようなわけであつたそう。

ひとしきりあの藪の前にある枇杷の古木へ熊蜂が来て恐しい大きな巣をかけた。

すると医者の内弟子で薬局、拭掃除もすれば総菜畠の芋も掘る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯の熊蔵という、その頃二十四五歳、稀塩散に単舍利別を混ぜたのを瓶に盗んで、内が吝嗇じやから見附かると叱られる、これを股引や袴と一所に戸棚の上に載せておいて、隙さえあればちびりちびり飲んでた男が、庭掃除をするといつて、件の蜂の巣を見つけたつけ。

縁側へやつて来て、お嬢様面白いことをしてお目に懸けましよう、無様でござりませんが、私のこの手を握つて下さりますと、あの蜂の中へ突込んで、蜂を掴んで見せましよう。お手が障つた所だけは齧しましても痛みませぬ、竹箒で引払いては八方へ散らばつて体中に集られてはそれは凌げませぬ即死でござりますがと、微笑んで控える手で無

理に握つてもらい、つかつかと行くと、凄じい虫の唸、やがて取つて返した左の手に熊蜂が七ツ八ツ、羽ばたきをするのがある、脚を振うのがある、中には掴んだ指の股へ這出しているのがあつた。

さあ、あの神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛の巣のように評判が八方へ。その頃からいつとなく感得したものとみえて、仔細あつて、あの白痴に身を任せて山に籠つてからは神変不思議、年を経るに従うて神通自在じゃ。はじめは体を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果は間を隔ていても、道を迷うた旅人は嬢様が思うままはツという呼吸で変ずるわ。

と親仁がその時物語つて、ご坊は、孤家の周囲で、猿を見たらう、蟻蝠を見たであらう、兎も蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩！あわれあの時あの婦人が、墓に絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸われたのも、夜中に魑魅魍魎に魔われたのも、思い出して、私はひしひしと胸に当つた。

なお親仁のいうよう。

今の白痴も、件の評判の高かつた頃、医者の内へ来た病人、その頃はまだ子供、朴訥な父親が附添い、髪の長い、兄貴がおぶつて山から出て来た。脚に難澁な腫物があ

つた、その療治を頼んだので。

もとより一室を借受けて、逗留をしておつたが、かほどの悩は大事じゃ、血も大分に出さねばならぬ、殊に子供、手を下すには体に精分をつけてからと、まず一日に三ツずつ鶏卵を飲まして、気休めに膏薬を貼っておく。

その膏薬を剥がすにも親や兄、また傍のものが手を懸けると、堅くなつて硬ばつたのが、めりめりと肉にくつついて取れる、ひいひいと泣くのじゃが、娘が手をかけてやれば黙つて耐えた。

一体は医者殿、手のつけようがなくなつて身の衰をいい立てに一日延ばしにしたのじゃが三日経つと、兄を残して、克明な父親は股引の膝でずつて、あとさがりに玄関から土間へ、草鞋を穿いてまた地に手をついて、次男坊の生命の扶かりまするように、ねえねえ、というて山へ歸つた。

それでもなかなか撈取らず、七日も経つたので、後に残つて附添つていた兄者人が、ちようど刈入で、この節は手が八本も欲しいほど忙しい、お天気模様も雨のよう、長雨にでもなりますと、山畠にかけがえのない、稲が腐つては、餓死でござりまする、総領の私は、一番の働手、こうしてはおられませぬから、と辞をいって、やれ泣くでね

えぞ、としんみり子供にいい聞かせて病人を置いて行つた。

後には子供一人、その時が、戸長様の帳面前年紀六ツ、親六十で児が二十なら徴兵はお目こぼしと何を間違えたか届が五年遅うして本当は十一、それでも奥山で育つたから村の言葉も碌には知らぬが、伶俐な生れで聞分があるから、三ツずつあいかわらず鶏卵を吸わせられる汁も、今に療治の時残らず血になつて出ることと推量して、べそを掻いても、兄者が泣くなといわしつたと、耐えていた心の内。

娘の情で内と一所に膳を並べて食事をさせると、沢庵の切をくわえて隅の方へ引込むいじらしさ。

いよいよ明日が手術という夜は、皆寐静まつてから、しくしく蚊のように泣いているのを、手水に起きた娘が見つけてあまり不便さに抱いて寝てやった。

さて治療となると例のごとく娘が背後から抱いていたから、脂汗を流しながら切れものが入るのを、感心にじつと耐えたのに、どこを切違えたか、それから流れ出した血が留まらず、見る見る内に色が変わつて、危くなつた。

医者も蒼くなつて、騒いだが、神の扶けかようよう生命は取留まり、三日ばかりで血も留つたが、とうとう腰が抜けた、もとより不具。

これが引摺つて、足を見ながら情なそうな顔をする。蟋蟀きりぎりすがもがれた脚あしを口くわに銜くわえ
て泣くのを見るよう、目もあてられたものではない。

しまいには泣出すと、外聞もあり、少焦すこじれで、医者おそつは恐おそしい顔らをして睨にらみつけると、あ
われがつて抱きあげる娘の胸に顔をかくして縋すがるさまに、年とし来ころ随ずい分ぶんと人ひとを手てにかけた
医者い者がも我がを折うつて腕うで組ぐみをして、はツため息いき。

やがて父てて親おやが迎むかへにえごごつた、因果いんがと断念あきらめて、別べつに不足ふそくはいわなんだが、何分なんぶん小兒こどもが
娘の手てを放はなれようといわぬので、医者い者がも幸さいいわいい言い訳わけかたがた、親おや兄あにの心こころをなだめるため、
そこで娘こどもに小兒こどもを家うちまで送おくらせることにした。

送おくつて来たきたのが孤家ひとりごで。

その時分ときはまだ一個ひとつの荘そう、家うちも小二十軒こにじゅうけんあつたのが、娘むすめが来きたて一日二日いちにちふたにち、ついほだされ
て逗とり留とどめた五日目ごにちめから大雨ふりだが降ふり出した。滝たきを覆くつすようえで小歇おやみもなく家うちに居ゐながら皆みな簀すい
笠かさで凌しのいだくらい、茅草かやぶきの繕つくろいをすることはさて置おいて、表うらの戸かどもあけられず、内うちか
ら内うち、隣となり同士どうし、おうおうと声こゑをかけ合あつてわざかにまだ人種ひとたねの世よに尽つきぬぬを知るばか
り、八日やっぴを八百年はちひゃくねんと雨あめの中なかに籠こもると九日目くにちめの真夜中まよなかから大風おほいぜきが吹ふ出してその風かぜの勢いきほここが
峠とうげというとこころでたちまち泥海どろうみ。

この洪水で生残つたのは、不思議にも娘と小児とそれにその時村から供をしたこの親仁ばかり。

おなじ水で医者の内も死絶えた、さればかような美女が片田舎に生れたのも国が世がわり、代がわりの前兆であろうと、土地のものは言い伝えた。

嬢様は帰るに家なく、世にただ一人となつて小児と一所に山に留まつたのはご坊が見らるる通り、またあの白痴につきそつて行届いた世話も見らるる通り、洪水の時から十三年、いまになるまで一日もかわりはない。

といい果てて親仁はまた気味の悪い北叟笑。

(こう身の上を話したら、嬢様を不便がつて、薪を折つたり水を汲む手助けでもしてやりたいと、情が懸ろう。本来の好心、いい加減な慈悲じゃとか、情じゃとかいう名につけて、いつそ山へ帰れたかんべい、はて措かつしやい。あの白痴殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換にやあ、嬢様は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて獣にするわ、殊にその洪水以来、山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘う怪しの水、生命を取られぬものはないのじや。

天狗道にも三熱の苦惱、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩せて手足が細れば、谷川を浴

びると旧の通り、それこそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の實も落つる、袖を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。

しかもうまれつきの色好み、殊にまた若いのが好じやで、何かご坊にいうたであらうが、それを実としたところで、やがて飽かれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、たちまち形が変ずるばかりじや。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

妄念は起さずに早うここを退かつしやい、助けられたが不思議なくらい、嬢様別してお情じやわ、生命冥加な、お若いの、きつと修行をさつしやりませ。とまた一ツ背中を叩いた、親仁は鯉を提げたまま見向きもしないで、山路を上の方。

見送ると小さくなつて、一座の大山の背後へかくれたと思うと、油旱の焼けるような空に、その山の巔から、すすくと雲が出た、滝の音も静まるばかり殷々として雷の響。

藻抜けのように立っていた、私が魂は身に戻った、そなたを拝むと斉しく、杖をかい込み、小笠を傾け、踵を返すと慌しく一散に駈け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨、親仁が婦人に齎らした鯉もこのために活きて孤家に着いたらうと思う大雨であつた。」

こうやひじり
 高野聖はこのことについて、あえて別にちゆう註して教おしえを与あたえはしなかつたが、翌朝たもと袂たもとを分わつて、雪せつ中山ちゅうやま越こえにかかると、名残なごり惜おしく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第しだいに高く坂道のぼを上る聖の姿、あたかも雲にが駕して行くように見えたのである。

(明治三十三年)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 泉鏡花」筑摩書房

1991（平成3）年10月20日 第1刷

1995（平成7）年8月15日 第2刷

底本の親本：「現代日本文学大系5」筑摩書房

1972（昭和47）年5月15日

初出：「新小説 第五年第三卷」春陽堂

1900（明治33）年2月1日

入力：真先芳秋

校正：林めぐみ

1999年1月30日公開

2012年4月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高野聖

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>